

思い出

徳島県 朝田 彰 一

私は昭和十六（一九四一）年に建設会社に入社し、同時に満州支店に転勤して現地で軍工事に従事していました。現地徴兵検査の結果は第二乙種となり、軍隊には縁のないものと思っていた矢先のことです。昭和十九年六月九日、突然赤紙（臨時召集令状）を受領、この日が私にとって軍隊とのかかわり合いの始まりでした。

翌十日には、原隊の東寧野戦道路隊に入隊。国境付近で道路を建設していましたが、皮肉にも日ソ開戦時に、この道路からソ連軍が進入し、原隊は全滅した由です。

臨時召集期間は三カ月とと思っていましたが、戦運急を告げる状況では到底除隊の可能性もなく、幸い班長のすすめもあって、十月に入隊してきた初年兵と同期に幹候を志願しました。

教育隊での訓練は、単純明快な軍隊の理念が私には合っているらしく、少しも苦痛ではなく、充実した日々を送れたものと思っています。ただし体力にはあまり自信がなく、鉄舟をかついでの運河演習にはさすがに顎を出したものです。楽しい思い出も多く、演習中に、今日は気分が良いからとの区隊長の命令で、全員小休止して素っ裸になり、河に飛び込み水浴したこと、丘の上で休憩しながら、八月頃には一大変事が起こるだろうとの区隊長の言葉が現実のものになったこと、等が印象深く思い出されます。

終戦、武装放棄、そして入ソ前の集結地である牡丹江の広野で、見習士官を中心にした五〜六人の兵士の集団死体が累々と横たわる戦慄する光景を目の当たりに見ましたが、その中に同期入社の子兵見習士官の親友がいたことを知り、断腸の思いがしました。またこの牡丹江には会社の出張所があり、一年半前までは行動の拠点にしていた所であり、何かの作業で街へ出て破壊された家並み

を見たときは、さすがに「国破れて山河あり」の
感じを深くしたものです。

抑留生活の前半の仕事は、生まれて初めて馬を
使つての運搬作業で、最初の頃はチャン馬に侮ら
れ、材木をつけることもできずに山を数回空車で
往復し、ノルマゼロでくやしい思いをしたことも
今では懐かしく思い出されます。

収容所は二、三方所変わったようですが、記憶
が定かではありません。シベリアの四年間の生活
の断片的な思い出はあまりにも多く、到底紙面に
は書ききれませんので省略します。

ただ、シベリアの大地から祖国の空を眺めなが
ら、『なぜ』我々が抑留者として今この地にいるの
か、善良な者が運命のいたずらに翻弄されている
自身の現実の姿をつくづく見ながら、切齒扼腕し
たものです。

幸いにも生命力に恵まれ、無事帰国することが
できました。元の会社に復帰し、何とか順調に会
社勤めも終えまして、現在平凡な年金生活に入っ

ています。

過酷なシベリア抑留生活の事実も六十数年を経
た現在、もはや風化しようとしています。当時を
振り返ってもむしろ懐かしくさえ感じられるよう
になった昨今です。

我々のシベリア抑留生活は一体何であつたの
か？ 多少とも子孫に残せるものがつかめれば
と念願しています。